

Title	知覚の本性から主体の本性へ : 前期メルロ＝ポンティのプログラム
Author(s)	川崎, 唯史
Citation	メタフュシカ. 2018, 49, p. 85-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71246
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

知覚の本性から主体の本性へ—前期メルロ＝ポンティのプログラム—

川崎唯史

はじめに

本稿の目的は、メルロ＝ポンティの主著『知覚の現象学』（1945）がどのような著作であるかについて、一つの見通しを与えることである。同書は序文、緒論および三つの部からなる。とりわけ理解が難しく、研究者の間でも見方が分かれるのは、第三部「対自存在と世界内存在」の目的と同書における位置づけである。本稿では、同書以前のテキストとの照合およびメルロ＝ポンティの現象学受容の検討を通して、同書がどのようなプログラムの下で構成されているかを考察することで、第三部に託された課題を明らかにする。

なお本稿は、2016年12月に提出され、浜渦辰二先生に審査の主査をお務めいただいた博士論文「メルロ＝ポンティと生き方の問い——交流の問題を中心に」の第一章第一節を大幅に改めたものである。日本を代表する現象学研究者の指導を仰いできたにもかかわらず、メルロ＝ポンティが現象学をどのようなプロジェクトとして引き受けたかを明確に示せなかったことは、数ある心残りの一つとなった。本稿を先生の退官記念号に寄せる所以である。

本稿は以下のように進む。まず、『知覚の現象学』のプログラムを説明する（第一節）。博士論文では同書の構成について紙幅を割けず、分かりにくい記述になってしまった。本稿では、二つの仕方と同書の目論見と構成を説明する。一つは心理学批判を通じた哲学的概念の改鑄という説明であり、もう一つは現象野から超越論的領野への変換という説明である。この節ではまた、最初の著作『行動の構造』（1942）と『知覚の現象学』が企図において共通点をもつことを指摘するとともに、第二の説明に対するフィンクの本質論からの影響も考察する。これらは博士論文で扱えなかった論点であるが、『知覚の現象学』の構成を理解する上で必須である。

第二節では、上述のプログラムの最終段階にあたるメルロ＝ポンティの超越論哲学について考察する。超越論的観念論を退けながら超越論的なものを論じるために、意識に代えて領野の概念が採用された、というのが主な論点である。ここでもフィンクからの影響を検討する。さらに、この哲学の目的は主体性という哲学的概念の改鑄にあることを明らかにする。

1 『知覚の現象学』のプログラム

本節では、『知覚の現象学』がどのような目的に向けて、いかなる構成において書かれたか、すなわち同書のプログラムを確認する。同書においてメルロ＝ポンティ自身が区別しているわけではないが、私見では二通りの仕方でのプログラムを説明することができる。それらは最終的に統合されるが、いったん分けて見ていこう。

1.1 心理学批判を通じた哲学的概念の改鋳

本項では第一の説明を行う。これは主に研究計画書や報告書に見られるものだが、著作にも散見される。また、少なくともテキスト上では先に現れる。

1.1.1 『行動の構造』以前のテキスト

まず、1933年に国立学術金庫の研究助成金申請時に提出された「知覚の本性に関する研究計画」を見よう。この文書はまず、「批判主義的」な学説が知覚を「客観的な宇宙を構成する」ような「知的操作」とみなすことを指摘する（PP, 11）。次にゲシュタルト心理学や神経学の研究を紹介し、判断などの知的作用が感覚的質料に形式を与えるという「知覚についての古典的な発想」（PP, 13）には根拠がないと批判する。「ゲシュタルト」（PP, 12）は感性的認識においてすでに現前しており、「感覚的なものや具体的なものの中には、知的関係に還元できないものが存在する」（PP, 13）。以上を踏まえて、メルロ＝ポンティは自身の研究目的をこう表現する。

要するに、哲学の現状において必要なことは、知覚の問題をめぐる実験心理学と神経学の諸成果の総合を試み、反省によってその正確な意味を規定し、そしておそらくは、現行のいくつかの心理学的および哲学的概念を鋳直すことであるだろう。（ibid.）

知覚に関して批判主義的な学説が用いる諸概念（形式と質料、感覚、判断など）について、当時の人間科学の成果を咀嚼した上で再検討し、必要に応じて概念の鋳直しを行う——これが第一の説明の最初のバージョンである。

翌年の報告書「知覚の本性」（1934）では、上の引用にいう「反省」の作業が明確化され、心理学への批判的な見方が前景化する。曰く、「知覚の心理学」は感覚・像・記憶といった概念とともに、批判主義的な「諸々の哲学的先入見を背負い込んでいる」（PP, 20）。それゆえ、哲学の水準で批判主義とは異なる考え方を獲得しなければならない。そこで注目されるのが現象学である。フッサールは「自身の哲学の進展によって心理学の原理が刷新されるものと期待している」し、『イデーニ I』（1913）は知覚の、フインクの「現前化と像」（1930）は記憶や像の分析を行っている（PP, 22）。それは「意識や感覚という概念そのものを改訂する」（PP, 24）ことを助けてくれる。メルロ＝ポンティが現象学に惹かれた最初の理由は、心理学に潜む批判主義的偏見を除去して概念を鋳直すというプログラムにあったと言える。

ただし、メルロ＝ポンティは同時に、現象学が心理学に「とって代わる」（PP, 22）のではな

いことを強調している。重要なのは「心理学をそれ自身の地盤の上で革新すること」(ibid.)である。概念の改鑄は外からの批判ではなく、心理学の自己批判の結果でなければならない。現象学は、心理学に参与してこの自己批判に貢献するものとして位置づけられる。

『行動の構造』では、「行動」と「ゲシュタルト」の概念が主題となる。行動の概念は「心的なもの」と「生理的なもの」という「古典的区別」に対して中立であるため、「それらを新たに定義する機会を与えてくれる」(SC, 2)。しかし主要な創始者であるワトソンにおいて、行動の概念は因果的・機械的思考に基づく「不十分な哲学的翻訳」にしか出会えず、「貧弱な哲学によって歪められていた」(ibid.)。ゆえに、「弁証法的思考」によって再翻訳する必要がある。つまり同書の企図は、まず行動の概念そのものを哲学的概念として鑄直した上で、古典的な諸概念の改訂に役立てることにある。

同書第三章は、ゲシュタルト概念の改鑄を課題とする。すでに「知覚の本性」で、ゲシュタルト心理学が認識論にもたらすはずの「重要な帰結」は、学派の内部では議論不足のためにうまく導き出されていないと言われていた (PP, 33)。『行動の構造』でも、ゲシュタルト概念の「哲学的分析」が不十分だとして、「あらゆる心理学の要請である実在論的要請から解放された哲学」だけがその含意を引き出しうると言われる (SC, 143)。とはいえその作業は、「外的な基準」によってゲシュタルトの哲学を「裁く」ことではない (SC, 147)。むしろ「ゲシュタルトの概念に再び立ち返り」、自然と理念の総合や唯物論と唯心論の二律背反の解決を「ゲシュタルト自身に問う」という道が示される (ibid.)。批判主義のように一方的に実在論を批判するのではなく、「下から」(SC, 2) 出発すること、つまり心理学の内的な進展としてゲシュタルトの哲学を遂行することが、メルロ＝ポンティの狙いなのである。

『行動の構造』の第三章まででは実在論的思考が批判され、自然・生命・心理作用はいずれも即自存在ではなく意識の対象であることが主張された (cf. SC, 199)。第四章は反対に、同書の結論を批判主義から区別することに捧げられる¹。「知覚の本性」が、ゲシュタルト心理学はカントの用語で認識を論じているというグールヴィッチの指摘を引いた上で²、「まったく異なった解決」(PP, 34)に向かわなければならないと述べていたことを踏まえると、この章こそが概念の改鑄というプログラムの核心をなすと言えよう。そこでは批判主義的な意識の概念、つまり知覚を知性的意識による判断作用の材料に還元する主知主義的な考えに対抗して、知覚的意識の独自性を損なわずに理解するような哲学が探究される。『行動の構造』は、心理学における自然主義と批判主義を批判した上で、究極的には意識という哲学の重要概念の改鑄に向かう著作なのである。

1.1.2 『知覚の現象学』

前置きが長くなったが、心理学の自己批判を通じた哲学的概念の改鑄というプログラムが『知

¹ 『行動の構造』第三章については加國尚志の研究を、第四章についてはジェラーツの研究を参照 (加國 2002, ch. 1; Geraets 1971, ch. 3)。

² グールヴィッチからの影響については澤田哲生の著書を参照 (澤田 2012, pp. 40-47)。なかでも重要なのは、恒常性仮説の放棄は現象学的還元等に等しいという考えがゴルトシュタインからグールヴィッチを介してメルロ＝ポンティに伝えられたという指摘である。

『知覚の現象学』でも維持されていることを確認しよう。『行動の構造』の場合と同様に、改鑄は二つの段階を踏むと考えられる。

第一段階は、同書の緒論から第二部までで行われるもので、心理学の諸概念を標的とする。緒論「古典的偏見と現象への還帰」では、感覚や連合といった経験論的な概念と、注意と判断という主知主義的な概念が批判的に検討され、その結果として世界の「直接的経験」の場を指す「現象野」の概念が導出される（PhP, 66）。第一部「身体」および第二部「知覚された世界」でも、経験論と主知主義の発想を検討し、それらの抱える困難を解決するものとして現象学的な見方を提示する、という行論が繰り返される。それが外的な批判ではなく心理学の自己批判である次第を、メルロ＝ポンティはこう表現する。

何の先入見も抱かないようにして、私たちは客観的思考を文字通りに捉え、客観的思考が自分自身に課さない問いをこれに課さないようにしましょう。たとえ私たちがこの客観的思考の背後に経験を見つけ出すように導かれるとしても、こうした移行は、ただ客観的思考そのものの行き詰まりによって動機づけられてのこととなるだろう。（PhP, 86）

客観的思考とは経験論と主知主義に共通する偏見であり、主体とは独立に世界が客観的に存在するという発想を指す。『知覚の現象学』第二部までの「直接的記述」（PhP, 419）の企図は、この発想が身体と世界の記述を通しておのずと行き詰まり、現象学的な見方に退けられることを示すことにある。

同書第三部で遂行される第二段階では、第一段階を受けて哲学的概念の改鑄が目指される。論拠をいくつか挙げる。まず、緒論の「諸現象の承認は、一つの反省理論と一つの新しいコギトを含んでいる」という一節に「後出の第三部を見よ」との注が付されている（PhP, 62）。現象を承認するとは、客観的思考を脱して現象学的世界に還帰することを指すが、その帰結として「反省」や「コギト」といった哲学的概念も刷新を迫られるという。また、第二部第一章の終わりにも「さしあたり、以上の記述と今後の記述は私たちを新しい種類の反省になじませる。私たちはこの反省に私たちの諸問題の解決を期待している」（PhP, 278）と、同趣旨の予告が見られる。第三部に入る直前には、それまでの記述が「客観的思考よりも根本的な理解と反省を定義する機会」を与え、新たな「主体」の概念を練り上げることが宣言される（PhP, 419）。後述する理由でもはや意識概念は使われていないが、内容としては、第三部は『行動の構造』第四章の課題をより本格的に取り上げ直すものだと言っていいだろう。

もう一つ証拠を引いておく。コレージュ・ド・フランスの教授立候補時に書かれた「資格と業績 教育計画」（1952）で、メルロ＝ポンティは同書第三部の目的をこう述べている。

知覚する身体と知覚された世界についてのこうした二重の分析が認められるとすれば、この分析が私たちの主体や精神の構想を手つかずのままにしておくことはありえないだろう。私たちは、このように記述される諸現象が可能であるためには、主体の本性がどのようなもの

でなければならないかを自らに問う必要がある。(PD, 20)

まとめると、哲学者のキャリアの最初期から存在した概念の改鑄というプログラムは、『行動の構造』のみならず『知覚の現象学』においても保持されていた。当時のフランスで支配的だった批判主義は、知覚経験をありのままに説明することに失敗する。改鑄は心理学の領域に留まらず、コギト、意識、主体といった哲学の中心概念にまで及ばざるを得ない。メルロ＝ポンティは1946年に主著の概要をフランス哲学会に報告するが、そのタイトル「知覚の優位性とその哲学的諸帰結」は、このプログラムを端的に表現している。

1.2 現象野から超越論的領野への変換

前項では、メルロ＝ポンティが現象学者になる以前から抱いていた構想が、『知覚の現象学』にも保存されていることを見た。本項では、現象学の核心をなす現象学的還元という方法論がいかに受容され、『知覚の現象学』の構成にどう活かされているかを考察する。

現象学的還元は「知覚の本性」でも紹介されているが (cf. PP, 22)、メルロ＝ポンティがこれを自分のプログラムに組み込むのは『行動の構造』においてである。第三章までの分析を経て、メルロ＝ポンティはあらゆる自然が即自的な実体ではなく意識の対象であるという結論に達する。この考え、つまり「考えられうる全実在を意識の対象として扱う哲学」は「超越論的態度」と呼ばれるが、同書第四章はこの態度に移行しているとされる (SC, 217)。意識は自然なままではその対象に没頭するため、知覚野において対象が現れることを忘れてしまう。それゆえ、「実在の世界がその特殊性のままに構成される根源的経験の一典型としての知覚に還帰するときには、意識の自然的運動の逆転が必要となる」(SC, 236)。超越論的態度への移行に必要なこの逆転が「現象学的還元」に他ならない (ibid.)。

ただし、還元のごうした説明はありふれたものである。注目すべきは、「因果的思考についての議論」を「行動のあらゆる水準において続行した」ことが、私たちを「超越論的態度」に導いたという言明である (SC, 222)。ここで彼は、心理学批判のプログラムを還元という方法論に組み込もうとしている。この点が重要なのは、『知覚の現象学』にも同じ発想が見られるからである³。緒論の結びで、その後の展開が次のように予示される。

しかし、現象野が十分に区画された今、この曖昧な領域に入り込み、心理学者とともに私たちの第一歩を確保しよう。心理学者の自己批判が第二次の反省によって私たちを現象の現象

³ 本稿では、『行動の構造』と『知覚の現象学』のプログラム上の共通点に注目する。両書の関係については二つの説明が有名である。1) 前者の著作では傍観者の視点を探っていたが、後者では知覚の中に身を置き入れた (PD, 17, 39)。2) 前者で最後に触れた知覚の問題を後者で改めて取り上げた (國領 2018, p. 32)。私見では、第一の説明は前者の第四章での現象学的還元を低く評価した上での短絡化であり、鵜呑みにするとプログラムの一貫性を見失う。第二の説明に異論はないが、後者の第一部・第二部が初めから「超越論的探求」であるかどうかは別の問題である (cf. 國領 2010, p. 40)。プログラムのポイントは、記述を通じた超越論的なものの発見にあると思われる。ただし、國領がメルロ＝ポンティの超越論哲学を「経験一般の可能性の条件」(ibid.)の探求とみなすのに対して、本稿ではあらゆる超越を主体との相関関係において捉える態度での探求と理解している。

に連れていき、現象野を決定的に超越論的領野に変換することを期待しつつ。(PhP, 77)

ここで還元は二段構えで構想されている。まず客観的思考の想定する即自的世界から現象野への還帰がなされ、次に現象野の超越論的領野への変換が行われる。フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』で示した道、つまり生活世界の存在論または現象学的心理学を経て超越論的現象学に至る還元之道が大枠では踏襲されていると言えよう⁴。

本稿では第二の還元注目する。心理学の自己批判がこの還元を動機づけるというのだが、この発想は第一義的には現象学を用いて概念の改鑄を行うために要請されたと考えられる。しかし、少なくともメルロ＝ポンティ自身は独断でこの発想を使っているわけではない。まず『行動の構造』では、フィンクの「現前化と像」の一節が根拠として引かれている。曰く、「自然的世界の全体性についての諸問題を、その究極まで辿ることは、ついには超越論的態度への移行を動機づけることになるという次第を、私たちは、自然的態度を離れなくても、示すことができるであろう」(Fink 1930, S. 279, cf. SC, 222)。フィンクは現在の想起を論じる中で注として括弧書きしたにすぎないし、心理学を話題にしているわけでもないが、メルロ＝ポンティはここに心理学批判が第二の還元を動機づけるという考えを見出したのである。

フィンクは『知覚の現象学』でも参照されている。多岐にわたる影響のうち、ここで注目したいのは、同書第三部の課題が「現象学の現象学」(PhP, 419)と表現されていることである。明示的な参照はないが、『第六デカルト的省察』が念頭にあると考えていい(cf. 八幡 2012)。これはフィンクがフッサールの指示を受けて『デカルト的省察』(1931)の改訂とともに作成した著作で、「超越論的方法論の理念」という副題をもつ。ヴァン・ブレダ神父によれば、メルロ＝ポンティは1942年の夏、マルセイユでガストン・ベルジェに同書を見せてもらったという(ヴァン・ブレダ 1972, p. 111, cf. PhP, ii)⁵。

ただし、メルロ＝ポンティがこの極めて難解な著作を一夏のうちに理解しえたのか、また同書の企図を忠実に引き受けたのかと言え、いずれも肯定的には答えがたい。たとえば同書において「構築的現象学」は、超越論的な生を超える非直観的なものを扱うとされるが(cf. Fink 1988, S. 8)、メルロ＝ポンティはこれを歴史学や社会学に近いものとして紹介している(PhP, i)。またフィンクにとって現象学の現象学とは、現象学において匿名的に作動している現象学する者である超越論的傍観者が自己自身を主題化することだが、『知覚の現象学』ではこうした方法論的関心は強くない⁶。

⁴ 『知覚の現象学』には第一の還元しかないとの見方もあるが(Romdenh-Romluc 2010, p. 22)、メルロ＝ポンティが否定しているのは構成する意識として超越論的主観性を捉えることであって、第二の還元そのものではない(cf. PhP, 419)。詳細は次節を参照。

⁵ ベルジェは『フッサール哲学におけるコギト』でも『第六省察』に言及している(Berger 1941, p. 115)。同書はフィンクの他の論文も30回以上参照している。

⁶ スミス(Smyth 2014, pp. ix-xxxiii)は『第六省察』の影響を重視し、『知覚の現象学』第三部は方法論だと主張するが、本稿は主体概念の改鑄が同部の主眼だと考える。現象学する者としての私だけでなく、主体性一般が問題になっている。フィンクの影響も見られる「コギト」の章の表現論も、方法論に尽きない射程をもつ(cf. PhP, 342)。

それゆえ現象学の現象学については、『第六省察』と『知覚の現象学』を突き合わせる前に、後者における位置づけを検討する方がいいだろう。直接的な現象学的記述に現象学の現象学を付加することの内実を、メルロ＝ポンティは二通りの仕方で述べる（PhP, 419）。1) 客観的思考より根本的なロゴスを見出すためにコギトに立ち帰ること、2) 主体の根底に時間を見出すことで、身体・世界・事物・他人の逆説を理解すること。これらはそれぞれ第三部第一章・第二章の課題だが、両者とも、第二部までの直接的記述を踏まえて主体の概念を作り直すこと、つまり前項で見た哲学的概念の改鑄を狙っていることは見やすいだろう。

そして本項では改鑄のプログラムが還元という方法論に組み込まれていく次第を確認してきたが、この組み込みは当該段落にも見られる。曰く、世界や事物といった諸々の超越を取り上げる中で、私たちは「真に超越論的なもの」たる「両義的な生」を発見したので、今やこれを考察せねばならない（PhP, 418-419）。つまり、あらゆる超越は即自在ではなく、両義的な生において私と交流する限りでのみ存在することが明らかになったので、超越から両義的な生へと視線を向け変えねばならない。とすると、メルロ＝ポンティにとっての現象学の現象学とは、結局は本節で見てきたプログラム、つまり心理学の自己批判に動機づけられて超越論的態度へと移行した上で主体概念を改鑄することに他ならないと言える。

本節のまとめとして、『知覚の現象学』の構成を改めて説明しよう。第一部と第二部は、身体、世界、事物、他人などを主題として、超越の即自的実在性を前提する客観的思考がおのずと行き詰まり、現象野における主体と超越の交流を記述する現象学がこれをのり越えることを論証する。その中で、主体の両義的な生が超越の主体への現象を可能にしていることが明らかになることで、超越論的態度への移行が動機づけられる。主題ごとに何度も与えられるこの動機を本格的に引き受けて、第三部では問題関心が諸超越から主体の生へと逆転し、主体の概念が更新される。この態度変更こそ、現象野から超越論的領野への変換と呼ばれていたものである。それでは、なぜ領野という言葉が使われるのだろうか。メルロ＝ポンティの超越論哲学を理解する鍵の一つはそこにある。

2 メルロ＝ポンティの超越論哲学

本節では、メルロ＝ポンティのプログラムの最終段階にあたる超越論哲学の再定義について考察する。その目的は主体概念の改鑄にあるというのが本稿の考えである。これを示すために、第一項で従来の超越論哲学へのメルロ＝ポンティの批判を確認し、第二項で改鑄に際して考慮すべき論点を示した上で、第三項で主体の概念が領野の観点から更新されることを明らかにする。

2.1 超越論的観念論への批判

まず、超越論哲学に関してメルロ＝ポンティが何をのり越えようとしていたかを確認しよう。メルロ＝ポンティによれば、従来の超越論哲学は反省によって主体を「超越論的意識」（PhP, 76）に還元する。それは、世界を自分の面前で展開し、いかなる不透明性もなく全面的に構成し所有する意識である。このように世界を意識に内在させる哲学は「超越論的観念論」（PhP, vi）と呼

ばれる⁷。

メルロ＝ポンティは二つの点でこれを批判する。一つは1933年の文書がすでに示唆していたもので、この意識概念が判断などの知的で顕在的な作用を範例とする主知主義的なものだという点である。知覚を知的作用よりも根源的なものと認めるならば、意識概念も知覚をモデルとして改鑄しなければならない。『行動の構造』でも、主知主義と結びついた批判主義と決別して「超越論哲学を新たに定義する」(SC, 241) 必要性が指摘されていた。

『知覚の現象学』で別の論点が追加される。主体を完全に超越論的意識へと還元できると考える哲学は、反省を徹底しておらず、不十分だというのである。その哲学は、絶対的意識への移行が本当に可能かどうかを問うことなく、いきなりそこに身を置く。メルロ＝ポンティによれば、その反省は自分の「始まり」(PhP, iv) を忘れている。哲学者が反省を始めるとき、それは「非反省的なものについての反省」(ibid.) である。つまり、身体をもって世界を知覚する非反省的生活についての反省である。そこで知られるのは、世界は私の身体という零点から一つの展望を通して知覚されることや、私が諸々の現象を自由に意味づけられるわけではないこと、つまりこの生活の「事実性」(PhP, 74) と「受動性」(PhP, 75) である。これらは絶対的意識への移行に「抵抗」(ibid.) する。

徹底的反省とは、この抵抗がのり越えられないことを積極的に認めて、非反省的生活こそが「反省の端緒的かつ恒常的かつ終局的な状況である」(PhP, ix) ことを認める反省である。そして、徹底的反省から導かれるのは、超越論的意識に代えて超越論的領野の概念を採用することである。なぜならこの概念は、「反省は世界全体および展開され対象化された多数のモノイドを眼下に収めることは決してなく、それはただ部分的な視界と有限な力しか自由にすることができない」(PhP, 74) ことを意味するからである。超越論的領野は、非反省的なものに留まり続ける徹底的反省が、その有限性と事実性を真面目に考慮することから生じる概念なのである。

2.2 作動的志向性

以上、超越論的領野の概念が採用される理由を確認した。それでは、領野の用語で超越論哲学を更新するとはどういうことか。目論みの本性からして、以下の二点は必須の課題である。1) 知的作用を意識のモデルとしてきた従来の超越論哲学とは異なって、知覚を世界との根源的關係として承認すること。2) すべての超越は主体との何らかの関わりにおいてのみ存在することを示すこと。本項ではまず、『知覚の現象学』第一部・第二部においてこれらの論点が先取りされていることを確認する。

そのために、ここでは「作動的志向性」の概念に注目したい。知的作用に対する知覚の優位を示すために、『知覚の現象学』は要所で志向性を二種類に分ける。例えば「志向弓」は、個々の対象を認識する「意識の生活」に対して、それ以前に「もっと密かな仕方」で諸対象を主体にとつ

⁷ メルロ＝ポンティの超越論的観念論批判がフッサール批判でもあるとの見方は根強いが、当時の現象学受容の文脈を踏まえて、主知主義的なフッサール解釈(例えばJ. ヴァールのそれ)への批判として解釈する方が実相に近いだろう。

て「存在させる」機能を指す (PhP, 158)。また「運動性」は、対象を表象する志向性から区別される「根源的な志向性」であり、やはり対象を身体にとって存在させる (PhP, 160)。性的な「雰囲気」にしても、明確な意識作用以前に世界を性的なものとして現れさせる暗黙のはたらきを指している (PhP, 196)。このようにメルロ＝ポンティは「表象志向性」の下に「より深い志向性」を見出す (PhP, 142)。それらを包括する概念が作動的志向性である。それは、「世界と私たちの生の自然的かつ前述定的統一をつくるものであり、客観的認識においてよりも私たちの欲望、価値づけ、風景においてはっきりと現れるもの、私たちの認識がその正確な翻訳たろうとしている原文を提供するものである」 (PhP, xiii)。上の二点、つまり表象的志向性または「作用の志向性」 (ibid.) より根源的である点と、世界が主体との相関関係において統一される点がこのに見て取れる。

メルロ＝ポンティはこの概念を「エトムント・フッサールの現象学の問題」 (1939) から借りている (cf. Saint Aubert 2005, p. 142)。フィンクによれば、「単純な原様態的な作用」つまり「単純な……についての意識」は、「ある単純化する能作の結果」である (Fink 1939, S. 266)。この能作が「作動的志向性」、つまり「生き生きと意味を形成し、意味を作動させ、意味を変化させる意識の機能」である (ibid.)。したがって志向的分析は、単純な作用から作動的志向性へと遡って問うことを課題とする。メルロ＝ポンティが現象学の独創性を志向性一般ではなく作動的志向性の発見に見出す背景には、こうしたフィンクのフッサール解釈があったと考えられる (cf. PhP, xii, 141)。

その本性からして、作動的志向性はすでに作動している姿でしか捉えられない。メルロ＝ポンティはこのことを、「世界の統一性は認識によって明白な同定作用の中で措定される前に、すでになされたものとして、またはすでに在るものとして生きられている」 (PhP, vii) と表現しているが、これもフィンクの議論に従うものと解せる。というのもフィンクは、作動的志向性を「先所与性」と等置しているからである (Fink 1939, S. 266)。『知覚の現象学』では「エトムント・フッサールの現象学的哲学と現代の批判」 (1933) も参照されているが、そこでフィンクは、個別的な作用と客観の関係について、「前もって与えられた世界」を「非主題的な基盤として前提している」と述べた上で、「本当に具体的な生」とは「普遍的な流れつつある恒常的な統覚」だと主張している (Fink 1933, S. 351-352)。池田裕輔によれば、個別的作用以前に与えられ、その可能性の条件となっている「空間時間的な世界地平」 (ibid.) に対応する意識様態は、草稿では「領野志向性」とも呼ばれている (池田 2012, p. 1180)。メルロ＝ポンティはそれを知らなかっただろうが、非主題的に前もって与えられる世界地平を問うている以上、両者がともに領野の概念を用いたことに驚きはない。

メルロ＝ポンティが先所与性という言葉を引きくのは後年のことだが (cf. S, 208)、『知覚の現象学』でも、知覚主体は人格的な私ではなく匿名的な〈ひと〉であるとか、感覚する自然的自我はすでに世界に引き渡されているといった表現によって、実質的には世界の先所与性を語っている (cf. PhP, 250, 277)。ところで、フッサールに批判的な論者はこの点を重視して、自己なき経験流の思想を同書に見出そうとするが、ヘイネマーの言うようにそれは行き過ぎである (Heinämaa

2015)。メルロ＝ポンティによれば、「どんな感覚も特定の領野に属している」(PhP, 250) という定式には、感覚の匿名性だけでなくその部分的性格も含意されている。領野の概念は、感覚された世界は世界全体ではないこと、感覚がつねに制限されていることをも意味する。つまり、世界はつねに知覚する身体に対して、あるパースペクティブにおいて与えられる。この意味で、身体は超越論的である (cf. 國領 2014)。だからこそ、超越論的領野という考えが可能なのである。

まとめると、構成的意識に代えて領野の概念を中心に据えるということは、作用志向性と対象の関係から遡って、作動的志向性における世界の先所与性と身体の超越論性を主題とすることに等しい。1960年の草稿でも、「意識というものが実は作用なき志向性、作動的志向性であること」と「主体を領野として定義すること」が緊密に結びついている (VI, 287-288)。『知覚の現象学』第一部・第二部は、客観的思考の批判を通して作動的志向性を発見し、領野の用語で超越論哲学を再定義する必要性を示したと言えるだろう。

2.3 私是一个の領野である

そこで最後に、ごく簡単ながら、同書第三部において領野の概念が核心的な意義をもつことを確認しよう。第一章「コギト」では黙せるコギトと語られたコギトという対概念が有名だが、その眼目は作動的志向性と諸作用の関係を表現の観点から理解することにある。黙せるコギトにも、前項で見た二側面がある。それは一方で「一般的に或るもの」を出現させる「根源的臆見」(PhP, 454)、つまり「世界についての包括的で未分節な把握」(PhP, 463)であり、あらゆる作用に先立って世界を与えるという先所与性をもつ。他方でこの概念は、他ならぬこの私に対して世界が与えられることをも意味する。「私による私の体験」や「格変化しない主体性」といった言葉がこの側面を語っている (PhP, 462)。世界は作用の「対象」ではないから「構成する主観」を必要としないが、さりとて即自的実在ではなく、作用以前の「根源的な世界投企」を通じて私に与えられる (PhP, 465)。「私是一个の領野であり、一个の経験である」(ibid.) という定式は、このように刷新された超越論哲学における主体概念の改鑄を要約するものである。

第二章「時間性」も、主知主義的な時間論を、領野的・作動的志向性に定位することでのり越える試みである。主知主義にとって、過去・現在・未来は意識の前に等しく並べられた対象であり、綜合作用がそれらの前後関係を作る。だがこの考えは、現在が過ぎ去るという「移行」(PhP, 475)から着想を得ているにもかかわらず、この根源的な経験を歪めている。真に時間を学ぶには、「現前野」(ibid.)に還帰し、知的作用の下で作動している志向性、つまり未来予持や過去把持に注目せねばならない。すると、これらの志向性は「中心的な〈私〉からではなく、いわば私の知覚野そのものから発する」(PhP, 476)ことが理解される。

メルロ＝ポンティは時間に関する作動的志向性を「受動的綜合」とも言い換えるが、彼はこの概念に「多様が私たちによって貫かれているということ、けれどもその綜合を実行するのは私たちではないということ」を語らせている (PhP, 488)。ここにも、超越論哲学に留まりながら、その中心を知的作用から作動的志向性に移すという企図が見て取れる。時間は作用の産物ではなく、私を通して自ら湧出する。そのような自然発生性をもつ時間性によって主体性を基礎づける

ことで、同書のプログラムは完遂されるかに見える。

しかし私見では、『知覚の現象学』にはさらなる深みがある。主体は領野として捉え直されるわけだが、メルロ＝ポンティは超越論的領野の始まりをも問うているからである。結論だけ言えば、その始まりとは主体の「誕生」である。本節で見てきた主体性の二側面は、究極的にはこの「超越論的出来事」(PhP, 466)によって基礎づけられる (cf. PhP, 413, 489)。誕生は時間の受動的綜合の始まりでもあるため、時間論も最終的には誕生論に回収される (cf. PhP, 488-489)。同書の最深部に潜む誕生の哲学を理解しなければ、同書の全容は解明できない。また、誕生はいわゆる超越論的主観性の受肉と別の事柄ではないから、超越論的現象学や構築的現象学、そして現象学の限界問題に関するフッサール・フィンク・メルロ＝ポンティの比較研究も、誕生論を踏まえて初めて意義を獲得するだろう。もはや紙幅は尽きたので、本稿では予告に留め、実際の作業は別稿を期することにした。

おわりに

本稿ではまず『知覚の現象学』のプログラムを考察した。心理学の自己批判を通じた哲学的概念の改鑄という企図が最初に存在し、そこに還元による超越論的態度への移行という現象学的な考えが加わった。両者の融合態が、客観的世界から現象野へ、そして超越論的領野へと進む『知覚の現象学』のプログラムである。第二節では、意識に代えて領野の用語で超越論哲学を書き換えることについて、作動的志向性の概念に注目して考察した。それは、対象に向かう知的作用に先立って世界地平を与える根源的臆見に定位する一方で、世界が他ならぬこの私に与えられるがゆえに、領野としての私に超越論性を認める哲学である。当時のフランス哲学界で優勢だった批判主義ののり越えという動機が、領野と作動的志向性を中心に据えたメルロ＝ポンティの現象学理解を導いたと考えられる。

本稿を通じて、メルロ＝ポンティの企図の中心には主体概念の改鑄があること、そしてこの目的を踏まえて初めて彼にとっての現象学を見通せるようになることを示せたと思われる。ただし課題は多い。誕生論だけではない。『知覚の現象学』に超越論哲学があるなら、そこに間主観性はどう関わるのか、超越論的他者は論じられるのか——浜渦先生はこの点に関心を寄せられよう (cf. 浜渦 1995, ch. 12)。これらの問いにも近いうちに取り組むことを約束して、本稿を閉じることにしたい。

(かわさきただし 国立循環器病研究センター医学倫理研究部・流動研究員)

謝辞

本稿は、科学研究費(16H03346)の助成を受けて行った研究成果の一部である。鈴木崇志氏と佐野泰之氏からの有益なコメントに感謝する。

文献

引用中の強調はすべて原文による。メルロ＝ポンティの著作を引用する際は以下の略号を用いた。

メルロ＝ポンティの著作

PD: *Parcours deux. 1951-1961*, Lagrasse, Verdier, 2000.

PhP: *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945.

PP: *Le primat de la perception et ses conséquences philosophiques*, Lagrasse, Verdier, 1996.

S: *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.

SC: *La structure du comportement*, 1942, Paris, PUF, coll. « Quadrige », 2009.

VI: *Le visible et l'invisible, suivi de Notes de travail*, texte établi par Claude Lefort, 1964, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 1979.

その他の文献

Berger, Gaston (1941), *Le cogito dans la philosophie de Husserl*, Paris, Aubier.

Fink, Eugen (1930), « Vergegenwärtigung und Bild: Beiträge zur Phänomenologie der Unwirklichkeit », *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, vol. 11, 239-309.

— (1933), « Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik », *Kant-Studien*, vol. 38(1-2), 319-383.

— (1939), « Das Problem der Phänomenologie Edmund Husserls », *Revue Internationale de Philosophie*, vol. 1(2), 226-270.

— (1988), *VI. Cartesianische Meditationen. Die Idee einer transzendentalen Methodenlehre*, H. Ebeling, J. Holl et G. van Kerckhoven (Hg.), Dordrecht, Kluwer Academic Publishers.

Geraets, Theodore F. (1971), *Vers une nouvelle philosophie transcendentale. La genèse de la philosophie de Maurice Merleau-Ponty jusqu'à la Phénoménologie de la perception*, The Hague, Martinus Nijhoff.

Heinämaa, Sara (2015), « Anonymity and personhood: Merleau-Ponty's account of the subject of perception », *Continental Philosophy Review*, vol. 48 (2), 123-142.

Romdenh-Romluc, Komarine (2010), *Routledge Philosophy Guidebook to Merleau-Ponty and Phenomenology of Perception*, New York, Routledge.

Saint Aubert, Emmanuel (2005), *Le scénario cartésien. Recherches sur la formation et la cohérence de l'intention philosophique de Merleau-Ponty*, Paris, Vrin.

Smyth, Bryan A. (2014), *Merleau-Ponty's Existential Phenomenology and the Realization of Philosophy*, New York, Bloomsbury.

池田裕輔 (2012), 「世界、有限性、構成：三十年代フランク思想の世界性概念、有限性の問題および構成概念についての考察」、『立命館文学』第 625 号、立命館大学人文学会、1172-1185 頁。

ヴァン・ブレダ、H. L. (1972), 「モーリス・メルロ＝ポンティとルーヴァンのフッサール文庫」、前田耕作訳、現象学研究会編『現象学研究』創刊号、せりか書房、98-123 頁。

加國尚志 (2002), 『自然の現象学——メルロ＝ポンティと自然の哲学』、晃洋書房。

國領佳樹 (2010), 「主著解題『知覚の現象学』」、『KAWADE 道の手帖 メルロ＝ポンティ』、河出書房新社、40-42 頁。

- (2014)、「メルロ＝ポンティの身体意識論」、『現象学年報』第30号、日本現象学会、99-106頁。
- (2018)、「『行動の構造』——行動主義批判と内観について」、松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編『メルロ＝ポンティ読本』、法政大学出版局、32-42頁。
- 澤田哲生 (2012)、『メルロ＝ポンティと病理の現象学』、人文書院。
- 浜渦辰二 (1995)、『フッサール間主観性の現象学』、創文社。
- 八幡恵一 (2012)、「メルロ＝ポンティとフィンク 「現象学の現象学」をめぐって」、『年報地域文化研究』第16号、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、218-239頁。

From the nature of perception to the nature of subject: Early Merleau-Ponty's Program

Tadashi KAWASAKI

The aim of this article is to formulate the philosophical program of Maurice Merleau-Ponty in his early period (1933-1945). This enables us to understand the constitution of *Phenomenology of Perception (PhP)* and the purpose of its third part.

Before starting his phenomenological study, Merleau-Ponty has suggested that the goal of his study on perception is to recast some psychological and philosophical concepts in use at that time. His main opponent is the intellectualism in the French Neo-Kantianism, which sees the intellectual act as the model of consciousness. It was his fight against this opponent that led Merleau-Ponty to the works of Husserl. In Merleau-Ponty's view, phenomenology is a strong support for psychology to escape the intellectualist prejudice of the world. Based on the self-criticism of psychology, Merleau-Ponty's program goes on to recasting some philosophical concepts. According to this account, we can interpret the third part of *PhP* as an essay to renew the concept of subject.

Merleau-Ponty's program is complicated by the adoption of the phenomenological method of reduction. The first step is return to the phenomenal field from the objective world presupposed by the realist science. The second step is conversion from the phenomenal field to the transcendental field. This means the passage to the transcendental attitude but does not implicate the total inclusion of the world in the transcendental consciousness. Merleau-Ponty claims that the true transcendental is the ambiguous life of embodied subject, to which the world is given prior to intellectual acts. This is why he uses the concept of transcendental field.

Merleau-Ponty's transcendental philosophy concludes his early program by recasting the concept of subject in terms of field and operative intentionality, instead of consciousness and intentionality of act. It is a struggle against the French intellectualism with help from the Husserlian and Finkian phenomenology.

〔キーワード〕

メルロ＝ポンティ、現象学、現象学的還元、超越論的領野、主体